



発行日 = 2001年3月25日 発行人 = 面出薫 編集 = 泉ルミ・田中裕美子
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内(田中裕美子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail = tanteidan@ppp.bekkoame.ne.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.09 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外照明探偵団レポート

ノルウェー ベルゲン

照明調査レポート

古典茶室の光 有楽苑如庵

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン報告

面出の探偵ノート

慶應大学世紀送迎会ライトアップ

照明探偵団 WEB リニューアル & URL 変更!

探偵団日記



海外照明探偵団

ノルウェー ベルゲン 2001年1月3日～9日



フロイエン山頂からの夜景

ベルゲン市はノルウェー第2の都市で人口は約22万人。街の大きさは小さいもので半日あれば徒歩で回れるほどである。ノルウェー特有のフィヨルドの末端に位置している。街の歴史は古く、1070年にオーラヴ・ヒッレ王によって開かれた。12世紀から13世紀までは、ノルウェーの首都でもあった。ベルゲンの地形は西ノルウェー特有のもので、山が海岸線まで迫っていて、わずかな平地に木造の家が密集している。山肌にも白い家のはりつくようように建っている。天候は、メキシコ湾流の影響を受け、その湿った空気が山にぶつかり、多くの雨を降らせる。今回は幸運なことに4日滞在の内、昼間は快晴に恵まれ、最終日のみ雪がふるという天候であった。

ベルゲンは19世紀中頃までドイツのハンザ商人による貿易が盛んな街であった。そのハンザ商人が使用していた三角屋根の木造建築が現在も港際に建ち並んでいる。この建物は世界文化遺産にも指定され、一番の観光名所となっている。

ベルゲン港を挟んで右側がこの三角屋根の



建物やオーエン王の館などがあるブリッゲン

と呼ばれるエリアである。港の左側がホテルやショッピングセンターなどの街の中心的なエリアである。この半島だけであれば、半日で歩き回れる距離である。今回は、このブリッゲン地区を中心に「北欧の長い夜」を調査した。

市内には大きなメインストリートはなく、2箇所の歩行者専用の通りがありショップなどが建ち並び賑わいを見せている。比較的大きな通りとしては、港周辺に4車線の大きな通りがある。その他は中世の町並みをそのまま残したような細く曲がりくねった石畳の小道が大半をしめる。

到着して、まず初めに街の全景を見ようと訪

もちゃのようなケーブルカーが標高320mの山頂まで引かれている。最大斜度26度、全長830mを約8分で登ってしまう。ここからの景色は素晴らしく、日没近くには夜景を見ようと寒空の中、多くの人々が訪れる。山頂にはカフェがあり、ライトアップされたこの建物の姿が街中から見上げた時に美しく山の稜線上に浮かんでいた。(※表紙の写真)山頂からの夜景は、ベルゲン港を一望でき、街の道路や細い路地が高圧ナトリウムランプの暖かい色味で動脈のように輝いている。この夜景撮影は、その美しさとは裏腹にマイナス12度の寒さとの戦いで、隣で撮影していた現地の少年と思わず顔を見合わせて苦笑いという一幕もあった。

寒さに打ち震えながら再びケーブルカーで下山し次に向かったのが「トーグ・アルメンング通り (Torg Almenning)」。幅員が50メートル、長さが250メートルの歩行者専用通りである。ベルゲンでは一番大きく、品揃えも豊富な(?)ショッピングセンターが両脇を固め、中央に船乗り達を称えた像が立っている。広場にポール灯は全く無く、両サイドの建物からワイヤーで吊り下げられたカテナリータイプの照明器具が設置されている。設置高さは、路面から約10メートル。(建物の3階からワイヤーが張られていた)設置間隔は約28メートルピッチで設置されていた。その他には、ベンチ下に埋め込みインジケーションがあり、多少の賑やかさを演出している。日没後、このカテナリー照明の直下で20ルクス。中央部分で7ルクスの路面照度を確保していた。ランプは高圧ナトリウムランプの400W相当。セミカットオフタイプの灯具からは、ややグレアのある光が人気の無い広場に輝いていた。周囲には連立したポール灯は殆ど無く、建物のファサードにあるブラケットの明かりが印象的な広場の景色をつ



れたのが「フロイエン山 (Floibanen)」。お
2 照明探偵団通信 vol.09

ブリッゲン水辺の景色



空じゅう張り巡らされたケーブル類

くっていた。

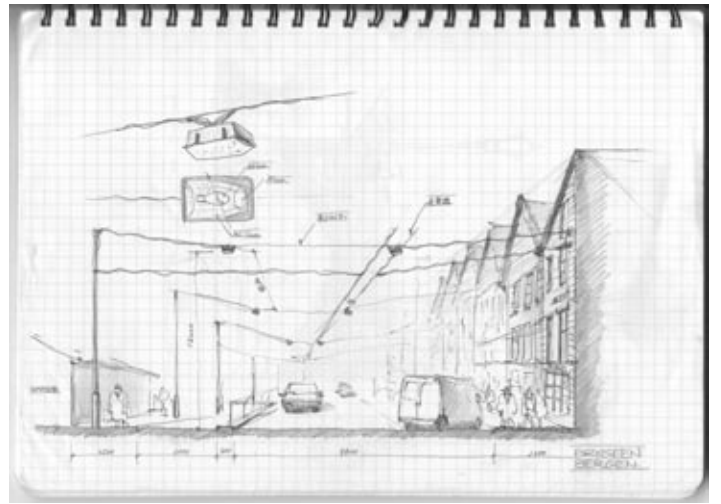
もうひとつの歩行者専用通り「ストラン・ガテン (Strandgaten)」トーチ・アルメニング通りよりも狭く、幅員約9m通りの全長約100mの小規模なものではあるが、ほどよく店舗がせりだした、いわゆるヨーロッパの通りの雰囲気をもった通りである。ここには、多少開けた場所にクラシックなポール灯がランダムに配置され、屋間には人が自然に集まり、立ち話をする光景が見られた。夜には、このポール灯の明かりとカテナリー照明によりベースライトがとられていた。路面照度は、平均40ルクス。目線レベルの鉛直面照度が約5ルクスであった。通りが狭いこともあり、建物のファサードにあたった明るさで数値の印象よりは明るく感じられた。中世の石畳が残り、19世紀の教会などが当たり前のように今も使われている街の中でこのようなクラシックなポール灯は違和感無く、周囲の景色に溶け込んでいた。

次の日に調査したのが歴史的建造物が多く残る。「ブリッゲン (Bryggen)」。港際にあるハンザ商人が使っていた三角屋根の木造建築は、奥行きのある建物で100年に一度の火災で焼かれたが、その度に修復されてきた。外装は綺麗にオレンジ色に塗られ、通りに面した所では土産物店が軒を連ねている。

道路、歩道の照明はやはりカテナリー照明

によるものであった。光源は高圧ナトリウムランプ400w相当で、設置高さが約12m、設置間隔が約30mピッチで取付けられている。世界文化遺産に指定された三角屋根の建物からワイヤーが張られ、この灯具が吊り下げられていた。光は均整よく路面を照らしていた。道路中央部で15ルクス。

歩道部では7.5ルクスという数値であった。交通量が少ない割に明るすぎる印象であった。その理由の1つとしてアスファルト舗装ではなく、石畳であることが挙げられるだろう。その反射率の良さで路面の輝度が増して明るく見える。しかし、その石畳を良く観察すると凹凸も多く、このくらいの明るさのほうがバリアフリーの点では良い環境なのであろう。その他では、オーエン王の館などがライトアップされ、対岸からみた水辺の景色をつくっている。ライトアップをしている建物のそばにはカテナリー照明はなく、輝度を抑えたポール灯が設置されていた。これは、対岸からの景色を考慮してのことなのであろう。カテナリーによって照らし出された建物のファサードやライトアップされた石造りの建物がベルゲン港の海面に美しく映り込み、印象的な景色を創りだしていた。ブリッゲンからの帰り道で最も新鮮な発見だったのが、家々の窓辺の明かりである。さりげなく窓辺に置かれたスタンドやシーリングライトが夜になると暖かい明かりを灯し、家路につく人を迎えるように各家々の窓辺を飾っている。寒い国だからなのか、ちょっとしたことで、明かりのもつ暖かさを最大限に活かした様子が通りを歩

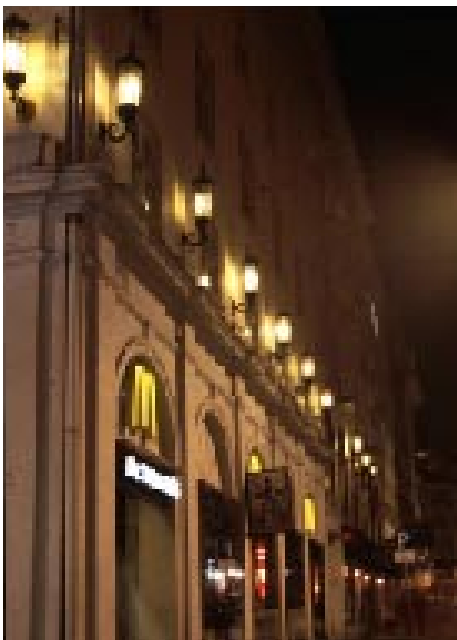


ブリッゲンスケッチ

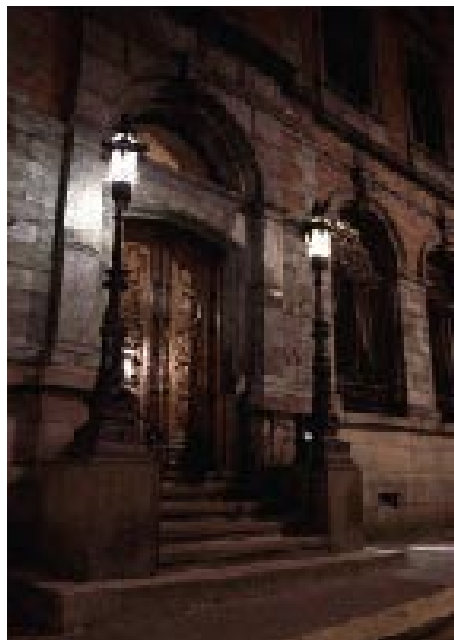
いていても感じ取れた。明かりが暮らしの中に溶け込み、楽しみや安らぎの明かりとして存在している様子を体験できたことは最大の収穫であったと思う。

北欧では、この時期あまり夜には人は出歩かない。これは行ってみて一番よく解ったことである。それだけに窓から見えるライトアップされた景色や家々から漏れてくるわずかな明かりを自然に楽しめる空間をそれぞれが工夫をこらして創り出していた。冬の北欧は寒いですが、それだけに明かりのもつ美しさが際立つのである。

(田中 謙太郎)



ファサードのブラケット



エントランスのポール灯



家々の窓際に灯るあかり

照明探偵 古典茶室の光

有楽苑如庵 2000年11月11日

●茶室のこと●

清々しい秋晴れを感じる間もなく寒さが訪れてしまった2000年でしたが、紅葉の季節（今年は冷え込み不足で橙葉ってところ？）の真ただ中に「和」の光の結晶である茶室の調査に行ってきました。近代・現代の建築家が解釈を加えて設計した茶室もいろいろありますが、出発点ということで今回は如庵と待庵を中心とした古典茶室を題材としました。

茶室はほんの少量の小さな空間でありながらも、最小単位としての空間と光の在り様は、その成立した背景や茶室内でとり行われる茶の湯の作法と密接に関係していて、非常に奥深いものがあります。

いつ命を失うか分からない戦国時代の中、山奥の仙人のように俗世間とは離れ、平穏で安らぎのある空間を求めたのが茶室の始まりです。茶室の中では人は皆平等であり、炉を囲みながらお互いに非常に近い距離で親交を深めることが最大の目的となります。茶室内は人の身長ほどの高さで低く抑えら

れ、基本的ににじって移動することが原則ということから、必然的に茶室空間のデザインは目線の高さの独特なスケールで構成されます。

また、茶の湯は招く側の亭主と、招かれる客との交流であり、この2つの関係が茶室内での座の位置に大きな意味を与えます。床（とこ）は亭主のもてなしの気持ちを表すもので原則として客座側につき、床に近いほど上座となります。露地を通過して茶室を訪れた客は、客座側に設けられた1辺450mm程度のにじり口という、小さな窓のような入り口から茶室に入り外界との縁を切って、亭主との交わりに没頭するのです。

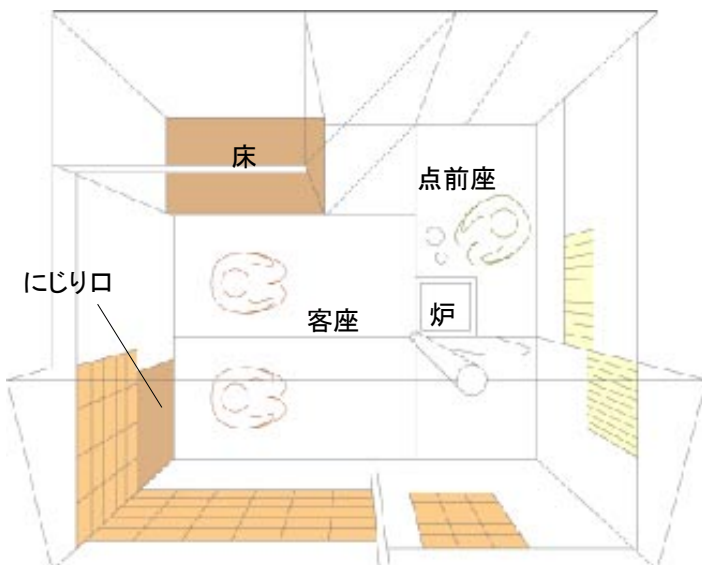
さてお待ちかね、ここでようやく光の話となります。壁面は土壁でできていて、棧（枠）が付く連子窓と土を塗り残して造る下地窓の2種類の窓がつくれ、多くの窓は障子とセットで開閉できる仕組みになっています。内部はたった少量の空間なので1つの窓が持つ影響力は大きく、構造的に成立させながら、

どの形・大きさ・数の窓を設けるか、設計者のセンスが問われるところとなります。

●如庵●

京都大山崎の妙喜庵・待庵、大徳寺龍光院・密庵席とともに国宝三名席に数えられる有楽苑・如庵は名古屋から30分ほどの犬山市にあります。他の国宝や多くの重文クラスの茶室は入室ができませんが、如庵は年1回11月に特別公開日を設けていて、この時ばかりは一般人でも入室して実際に茶室内を体感できます。（2001年より3月も公開）

如庵は二畳半台目の織田有楽作の茶室です。台目畳とは普通の畳の3/4の長さの畳で、お点前する亭主の座る畳（＝点前座）に使用されます。残りの二畳半が客用の客座となります。名デザイナーであった織田有楽は直線的で男性的な意匠を好み、如庵においても茶室に面した窓にはすべて棧のついた連子窓で構成しました。ここで窓の位置を見てみると、にじり口から点前座に向かって客座を囲むように軽快に連子窓が連続し、点前座側では2つの独立した連子窓として扱



有楽苑如庵



有楽窓



いを変えていることが分かります。さらに亭主側の連子窓の外側は竹が詰め打ちされていて、一般的な明かり障子である客座側の連子窓と、亭主側のこの窓では得ようとした光量が異なることが伺えます。客座側が明るく連続した窓、亭主側が輝度の抑えられた独立した窓という扱いであること、茶の湯が亭主が客をもてなす道理より成り立っていることを考えると、明るい光に囲まれることがより贅沢なことだったことは確かなようです。

明かり障子は面光源として客や亭主を囲むと同時に、障子に向かってみれば手前の対象物のシルエットを浮かび上げさせ、逆に障子を背に向ければ障子からの柔らかな光を受ける対象物を見せる効果を示します。まず自分が客として如庵に入ると、自分が座る周りには明るい窓があり、客座につく拝見する床がその窓によって丁度良く照らされ、亭主もお点前の所作もよく見えることとなります。亭主の背後の窓は輝度の抑えられているので亭主がシルエットとしては感じられませ

ん。今度は自分が亭主だとすると、目の前に広がる明るい窓とそこに浮かぶ客のシルエットが光景となるはずですが。ただしその光でお点前する炉の周りは明るいので機能的には合理的なのです。

ところで、亭主側の2つの竹が詰め打ちされた窓は有楽窓と呼ばれ、竹のスリットが写す虹色の光は大変美しいものです。なんと「東洋のステンドグラス」として世界的にも有名だそうです。ここでは空間構成から如庵の光を捉えてみましたが、短時間ながら体感した感想を言えば、そんなことより、太陽が雲に隠れたり顔を出したりする瞬間に起こる茶室内の表情と明るさの変化のダイナミックなこと！自然が織り成すオペレーションのす

客座を囲む連子窓

